

立命館創始140年・学園創立110周年記念企画
立命館大学産業社会学部・研究推進強化プロジェクト



アール・ブリュットと私たち

—— 共感する魂と身体

◎ *symposium*

立命館大学非常勤講師、振付家、ダンサー

砂連尾 理

NPO法人ダンスボックス エグゼクティブ・ディレクター

大谷 燠

ベニン大学マスコミ・パフォーミングアーツ学部、リサーチアシスタント

Osemwengie-Ehi Osazuwa

映像記録・取材 ● 河合宏信 (立命館大学大学院社会学研究科修士1回生)
目次 護 (立命館大学映像学部4回生)、小原光洋 (立命館大学映像学部3回生)

立命館大学産業社会学部教授、博士(社会学)

司会 | 遠藤保子

日時：2010年11月13日(土)

14:30 - 16:30

*入場無料 先着60名

会場：京都市大学のまち交流センターキャンパスプラザ京都 第1会議室

主催：立命館大学産業社会学部 遠藤研究室

映像学部 望月研究室

アール・ブリュットと私たち

—— 共感する魂と身体



アール・ブリュット(生の芸術)とは、フランスの画家ジャン・デュビュッフェが考案した言葉で、既存の芸術の影響を受けずに生み出された、常識にとらわれないユニークな発想で表現された芸術を意味しています。今日では、ハンディキャップのある人々が表現する芸術、さらには生活と密接にかかわっているアフリカの芸術を指すこともあります。ハンディキャップのある人々の芸術祭を主催した現代アーティスト嶋本昭三によりますと、「健全者は成功のために、本来の芸術性を見失うことがあります。生徒たち(注:ハンディキャップのある子ども)に打算はなく、私たちが学ぶことがたくさんあります」(1992年3月19日毎日新聞夕刊)と述べています。この指摘のように、アール・ブリュットを知ることは、今日の社会において芸術とは何か、を考えるととても重要になると思います。

そこで、このシンポジウムでは、芸術の中でもダンスに焦点を絞り、ハンディキャップのある人々によるダンスと生活の様々な場面で踊られるアフリカ(特にナイジェリア)のダンスとNPO法人DANCE BOXが2007年より、障がいの有無に関わらず多様な人たちとつくる新しい舞台芸術の可能性に取り組みスタートした循環プロジェクト、その中でも特に昨年ベルリンにて行ったTheater Thikwaとの共同プロジェクトを事例に、「芸術とは何だろう」という古くて、新しいテーマを様々な観点から考えてみたいと思います。

砂連尾 理

立命館大学非常勤講師、振付家、ダンサー

大阪生まれ。大学入学と同時にダンスを始める。'91年より寺田みさことダンスユニットを結成。近年はソロ活動を展開し、舞台作品だけでなく障がいを持つ人や老人、子ども達とのワークショップも手がけ、ダンスと社会の関わり、その可能性を模索している。また、音楽家や美術家など、自らの文脈が揺るがされる異ジャンルのアーティストとのコラボレーションも積極的に行っている。2002年7月「TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD 2002」にて、「次代を担う振付家賞」「オーディエンス賞」W受賞。2004年度京都市芸術文化特別奨励者。2008年より一年間、文化庁・新進芸術家海外留学制度の研修員としてベルリンに滞在。近年の作品に「あいこーるのじじょう」、「とつとつダンス」、「SAALEKASHI」等がある。

Osemwengie-Ehi Osazuwa

ベニン大学マスコミ・パフォーミングアーツ学部、リサーチアシスタント

ナイジェリア、ベニンシティ Benin City 生まれ。Edo カレッジやベニン大学で学ぶ。在学中からベニン市内にある Eguonuri 舞踊団、Uyiedo 演劇座、Stars 劇場、Ikon アフリカ演劇座、Edo 演劇座等においてドラマー、ダンサー、時にはシンガーとして活躍し、その活動は一般の人や専門家から高く評価された。2005年よりベニン大学のリサーチアシスタントに就任し、今日に至っている。2009年11月、はじめて来日し、立命館大学の学生を対象に、ナイジェリアの伝統的なダンスの意味、ダンスと音楽に関する講義を行い、さらにダンスや楽器演奏に関する実技指導も行った。

大谷 煥

NPO法人ダンスボックス エグゼクティブ・ディレクター

大阪生まれ。1991年から2001年までTORII HALL プロデューサー。1996年、「DANCE BOX」を立ち上げ、ジャンルを超えたコンテンポラリーダンスの公演・WSを年間約30本企画制作する。2002年DANCE BOXをNPO法人化。大阪・新世界フェスティバルゲート内に大阪市との公設置民営の劇場「Arr Theater dB」を開設し、アーティストの育成と地域社会とアートの新しい環境づくりに力を注ぐ。2009年4月、神戸市から招聘され新長田に拠点を移し「Arr Theater dB 神戸」を開設。近畿大学、神戸大学非常勤講師。『生きるための試行〜エイブル・アートの実験』(フィルムアート社/共著)

遠藤 保子

立命館大学産業社会学部教授、博士(社会学)

福島県生まれ。大学院からアフリカのダンスに関する文化人類学的研究を始め、ナイジェリア(1980~1982年)やケニア(2001~2002年)で長期フィールドワークを行い、2004年以降は、ほぼ毎年アフリカで短期フィールドワークを行っている。また、現代アーティスト嶋本昭三に関する研究論文をまとめ、過去には彼と共に芸術活動を行った経験もある。主な研究業績は、2006年9月「現代アーティスト嶋本昭三とパフォーマンス」立命館大学産業社会学部論集第42巻第2号pp.109-123、2001年1月『舞踊と社会—アフリカの舞踊を事例として—』文理閣、京都全211頁等。

映像記録・取材：河合宏信(立命館大学大学院社会学部研究科修士1回生)、目次護(立命館大学映像学部4回生)、小原光洋(立命館大学映像学部3回生)

会 場 | 京都市大学のまち交流センター キャンパスプラザ京都 第1会議室
〒600-8216 京都市下京区西洞院通塩小路下るキャンパスプラザ京都
(ビックカメラ前、JR京都駅ビル駐車場西側)

日 時 | 2010年11月13日(土) 14:30~16:30 *入場無料 先着60名

主 催 | 立命館大学 産業社会学部 遠藤研究室・映像学部 望月研究室

お問い合わせ | E-mail rits110.artbrut@gmail.com
Tel 075-466-3137 (遠藤研究室)

